

【研究ノート】

伊藤仁斎の訓読法と

『論語古義』の成立過程に関する研究（二）

丸 谷 晃
片 岡

龍 一 *
* *

伊藤仁斎『論語古義』「林本」訳注（二）

【論語古義 学而篇第二（第四章）】

〈学而篇第二章〉

【本文】

有子曰、其為人也孝弟、而好犯上者、鮮矣。不好犯上、而好作乱者、未之有也。

* 人文学部助教授 — 日本政治思想史

** 東海大学非常勤講師 — 東アジア思想史

【書き下し文】

有子ノ曰く、其ノ人と為りや孝弟にして、上ヲ犯スコトヲ好ム者ハ、鮮シ。上を犯スコトヲ好マズシテ、乱ヲ作スコトヲ好ム者ハ、未ダ之レ有ラズ。

【小註】

有子、孔子弟子。名若。犯上、謂于犯在上之人。鮮、少也。乱、謂逆理乱常之事也。言孝弟之人、不待學問、自不為不善也。蓋明孝弟為本然之善也。

【書き下し文】

有子ハ、孔子ノ弟子。名ハ若。上ヲ犯すハ、上ニ在るの人ヲ干犯スヲ謂ふ。鮮ハ、少なり。乱ハ、理に逆ひ常を乱るの事ヲ謂ふ。言ふところハ、孝弟の人は、學問ヲ待たずシテ、自ラ不善ヲ為す。蓋し孝弟ハ本然の善為るを明カス。

【現代語訳】

「有子」は、孔子の弟子で、名は若。「上を犯す」は、在上の人にはむかうことを言う。「鮮」は「すくない」の意味である。「乱」は、道理に反し日常的規範を守らない類いを言う。その意味は、「孝悌な者は、學問によらなくても、自然に悪事は働かない」。思うに、有子の言葉は、孝悌が人に本来的に備わっている善的性質であることを明らかにしているのである。

【注釈A—稿本】

【乱、謂逆理乱常之事也……】 以下の部分は「第二本」では「乱を作すとは、則ち悖逆争鬪の事を為す。此れ、人能く孝弟なれば、則ち其の心和順にして、上を犯すを好むこと少なく、必ず乱を作すことを好まざるの人なるを言ふなり」。ほぼ底本の形になるのは「元禄九年校本」の書き入れの段階。

【注釈B—主著】

【孝弟為本然之善】 「童子問」下一九では「東夷西戎南蠻北狄、声教の暨ばざる所、言語の通ぜざる所」でも必ず「孝弟忠信を以て善と為す」とされる。【語孟字義】良知良能1では「良知良能」（『四端』）を「本然之善」とする。

【注釈C—出典その他】

【有子、孔子弟子。名若】 【論語集註】。

【犯上、謂干犯在上之人】 【論語集註】。

【鮮、少也】 【論語注疏】（注）、【論語集註】。

【逆理乱常之事】 【論語集註】（程子語）中の表現。

【本然之善】 【中庸章句】1、【孟子集註】尽心上15。

【本文】

君子務本。本立而道生。孝弟也者、其為仁之本与。

【書き下し文】

君子本ヲ務ム。本立つテ道生ル。孝弟ハ、其レ仁の本為ルカ。

【小註】

務、専力也。本、猶根也。言君子之所為、皆法之所在、不可不則焉。君子凡事專用力於根本。根本既立、則其道生々不已也。故為仁者、以孝弟為本、則仁道充大、而足以保四海也。

【書き下し文】

務ハ、力ヲ專ニスルなり。本ハ、猶ヲ根ノごとし。言ふところハ、君子の為る所は、皆な法の在る所、則ラザンハアル可からず。君子ハ凡ソ事專ラ力ヲ根本ニ用ユ。根本既ニ立つトキハ、則ち其ノ道生々して已マズ。故ニ仁ヲ為ムル者ハ、孝弟ヲ以て本ト為ルトキハ、則ち仁道充大シテ、而以テ四海ヲ保ツニ足る。

【現代語訳】

「務」は力を専一にすることを意味する。「本」は「根本」に同じ。その意味は、「君子の行うことは、すべて法の存するところであり、必ずお手本とされる。君子はあらゆる事において根本に力を注ぐ。根本が確立すれば、その道は生き生きと活動して留まるところを知らない。だから、仁を修める者は、孝悌を根本とすれば、仁の道は充実拡大していき、天下全体を被うことになる」。

【注釈 A—稿本】

「君子之所為、皆法之所在、不可不則焉」 この語は「元禄九年校本」の書き入れ段階で初めて現われる。

「定本」では削除の指示。

「故為仁者、以孝弟為本……」 以下の議論は「元禄九年校本」の付箋で初めて現われる。「定本」ではこの前に「孝弟なる者は其れ仁に至るの本か」という語を挿入の指示あり。これは「林本」の、この箇所に対する「此くの如きときは仁を為るの本とよめと云に似てあしし。故に按ずるに、孝弟を以て仁に至るの本と為、かやうにてはいかん」という付箋を承けたものと思われる。

【注釈B—主著】

「君子之所為、皆法之所在……」 『語孟字義』君子小人1に「君子は天下の儀表」。

「道生々不已」 「生々」論的「道」観は、『語孟字義』天道4。「道」は「生々化々の妙を形容する語」

とは、『語孟字義』理1。「道」の「流行」を言うものは、『語孟字義』徳3、『童子問』下二九。「道」が空間的、時間的に充滿・貫徹し、摩滅しないとする例は、『語孟字義』学2、『童子問』上一四、中七二。

【注釈C—出典その他】

「務、専力也」 『論語集註』。

「本、猶根也」 『論語集註』。

「君子凡事專用力於根本」 『論語集註』。

「根本既立、則其道生々不已」 『論語集註』に「根本既に立てば、則ち其の道自ら生ず」。

「故為仁者、以孝弟為本」 『論語集註』(程子語)に「故に仁を為すには孝弟を以て本と為す」。

「仁道充大」 『論語集註』(程子語)に「其の道充大」。

「足以保四海」 『孟子』梁惠王上7、公孫丑上6。

【大註】

此章總贊孝弟之為至德也。孝弟之心、人人具足、雖孩提之童、亦皆有之。人道之大本、万善之所由生。雖仁道之大、不能不以此為本矣。則孝弟之德、不其大乎。孟子曰、孩提之童、無不知愛其親也。及其長也、無不知敬其兄也。親親、仁也。敬長、義也。無他。達之於天下也。其意以謂、仁義非他、擴充孝弟之心、而達之於天下、是也。与有子之言、分明若合符節。蓋祖述之也。而編者以此置諸首章之次。蓋明孝弟乃學問之本根。有旨哉。

【書き下し文】

此ノ章總ベテ孝弟の至德為ルコトヲ贊スルなり。孝弟の心は、人人具足し、孩提の童と雖も、亦た皆な之有り。人道の大本、万善の由りて生ずる所。仁道の大と雖も、此を以て本と為ざること能はず。則ち孝弟の德、其れ大ならずや。孟子曰く、孩提の童も、其ノ親を愛するを知らざること無し。其の長ずるに及んでや、其の兄を敬ふを知らざること無し。親を親しむは、仁なり。長を敬ふは、義なり。他無し。之を天下に達するなり、と。其ノ意に以謂へらく、仁義は他に非ず、孝弟の心を拡充して、之を天下に達する、是なり。有子の言と、分明に符節を合するが若し。蓋し之を祖述するなり。而して編者此ヲ以テ諸レ首章の次に置く。蓋し孝弟ハ乃ち學問の本根ナルコトヲ明カス。旨有るかな。

【現代語訳】

この章はすべて孝悌が最高の徳であることを称賛している。孝悌の心は、あらゆる人に備わっていて、二、三歳の幼児でもみなその心をもっている。孝悌は人の道の根本であり、すべての善がそこから生じる。大なる仁道も、この孝悌を根本とせざるを得ない。というわけで、孝悌の徳は偉大なものである。『孟

子」に「二、三歳の幼児でも、必ず親を愛し、成長すれば目上の人を尊敬することを知っている。親に親しむのは仁、目上を敬うのは義である。他でもない。親を親しみ目上の者を敬うことを、天下に広めるのである」とある。この孟子の言葉の意味を考えてみると、仁義とは孝悌の心を推し広めて、それを天下全体にゆきわたらせること以外ではない。これは、有子の語とまさしく符節を合す。おそらく有子は孟子の語を祖述したのだろう。そして、『論語』の編者がこれを首章の次に置いたのは、孝悌こそが学問の根本であることを明らかにしたのである。深い意味のあることである。

【注釈A—稿本】

この部分がほぼ底本の形になるのは「元禄九年校本」の付箋の段階。各稿本の改訂のあとが甚だしいため、以下、「第二本」「元禄九年校本」「定本」の改訂前の全文を掲げる。なお、「元禄十六年定本」は底本とほぼ同じだが、「此章総賛孝弟之為至徳也」のあとに「蓋し天下の美徳は、仁より大なるもの莫し」の語がある。

【第二本】

「此れ孝弟の美徳為るを言ひて、仁道の大と雖も、此を以て本と為すことを明らかにするなり」。

【元禄九年校本】

「此れ孝弟の美徳為るを言ひて、以て仁を為さんと欲する者は、必ず此を以て本と為さざる可からざることを明らかにするなり」。

〔定本〕

「此の章総べて孝弟の至徳爲ることを賛するなり。蓋し其の人と爲り孝弟なる者は、其の性の最善にして、道に近き者なり。則ち其の上を犯し亂を作すの事無きこと、必ず知る可し。此れ則ち徳に進み聖と作るの基本にして、以て仁に至る可し。仁は道なり。孝弟は其の本なり。苟くも此の本自りして、之を充たせば、則ち所謂道なる者生生して已まず。猶ほ源有るの水、之を導きて流れて四海に放り、根有るの木、之を培ふときは、則ち以て天に参すべきがごとし。故に曰く、孝弟なる者は其れ仁の本爲るか、と。見る可し。道と云ふは、乃ち仁を指すなり。而して孝弟は乃ち其の本なり。編者此を以て諸れを首章の次に置く。蓋し孝弟は乃ち学問の根本なることを明らかにす。旨有るかな」。

〔注釈B—主著〕

〔孝弟之為至徳〕 孝を「善の至極」「善の至大」とするのは、『大学定本』1、4。

〔孝弟之心、人人具足〕 不孝の人は人間ではないとの考えは、『童子問』中四〇。

〔拡充〕 「拡充」についてまとまった考えを述べている箇所は、『語孟字義』仁義礼智2、3、性5、学2、四端之心2、良智良能1、『童子問』上二二、一五、二二、四二、『仁斎日札』9、42、『孟子古義』公孫丑上6、離婁上1、下18、告子上8。

〔祖述〕 「祖述」に関してまとまった考えを述べている箇所は、『語孟字義』附「論堯舜既没邪說暴行又作」、『童子問』上五、下五一、『中庸章句』26。

〔孝弟乃学問之本根〕 『論語古義』子路20論註では「聖門の教は必ず孝弟を以て本と爲し、忠信を主と爲す」、『古学先生文集』一「送吉田元発序」では「孝を外にして別に所謂学なる者無し」、『語孟字義』忠信2、『論語古義』学而8小註では、「忠信」が学問の根本とされる。

【注釈C―出典その他】

「……人道之大本、万善之所由生」 『孝経』開宗明義に「孝は徳の本なり、教への由りて生ずる所なり」。

「孩提之童、無不知愛其親也。及其長也、無不知敬其兄也。親親、仁也。敬長、義也。無他。達之於天下也」 『孟子』尽心上15。

「拡充」 『孟子』公孫丑上6、尽心上15、尽心下31。

「祖述」 『中庸』26。

【論註】

論曰、仁者天下之大徳也。慈愛之心、自内及外、自邇至遠、充実通徹、莫所不達、即是仁也。故孟子曰、人皆有所不忍。達之於其所忍、仁也。即有子以孝弟為仁之本之意。蓋孝弟、性也。仁義、徳也。性者以有於己而言。徳者以達於天下而言。孟子以孝弟為其良知良能、則孝弟豈非人之性乎。易曰、立人之道、曰仁与義。中庸曰、知仁勇三者、天下之達徳也。仁義豈非天下之達徳乎。而孟子又以仁義為人之固有者、何也。是以仁義名性也。非為性之名。所謂以仁義名性者、若曰人之性善。故以仁義為其性也。毫釐千里之謬、正在於此。不容於不弁。

【書き下し文】

論二曰ク、仁ハ天下の大徳なり。慈愛の心、内自り外に及び、邇き自り遠きに至り、充実通徹して、達せざる所莫き、即ち是れ仁なり。故ニ孟子ノ曰ク、人皆な忍じざる所有り。之ヲ其ノ忍フ所口ニ達スルハ、仁なり、と。即ち有子孝弟ヲ以テ仁ノ本ト為の意。蓋し孝弟は、性なり。仁義は、徳なり。性は己に有す

るを以て言ふ。徳は天下に達するを以て言ふ。孟子孝弟を以て其ノ良知良能と為るときは、則ち孝弟豈に人の性に非ずや。易に曰く、人の道を立つ、曰く仁と義と、と。中庸に曰く、知仁勇の三者は、天下の達徳なり、と。仁義豈に天下の道徳に非ずや。而るに孟子又た仁義ヲ以テ人の固有ト為ルハ、何ぞや。是れ仁義ヲ以テ性ニ名づクルなり。性の名と為るに非ざるなり。所謂仁義を以て性に名づくる者ハ、人の性、善と曰ふが若し。故に仁義を以て其ノ性ト為。毫釐千里の謬、正ニ此ニ在リ。弁セザンハある容からず。

【現代語訳】

仁が性でないことについて論じる。

仁は天下全体を被う徳目である。慈愛の心が心の中から外に溢れ出て、身近な所から遠きへと進み、充滿し浸透して、すみずみへと及んでいく。これが仁である。だから『孟子』に「人にはおさえられない同情心がある。それを赤の他人に推し及ぼすことが、仁である」と言う。つまり、有子が孝悌を仁の根本としたのと同意である。思うに、孝悌は性であり、仁義は徳である。性とは自分に備わっているものについて言う。徳とは天下に通用するという観点から言う。孟子は孝悌を人の良知良能としているのだから、やはり孝悌は人の性である。『易』に「人の道を立てて、仁と義とよぶ」、『中庸』に「知・仁・勇の三つは、天下に通用する徳である」とあるのだから、やはり仁義は天下の道徳である。ところが、『孟子』は仁義を人に「固有」のものともしている。これはなぜだろうか。これは仁義によつて性を飾つて言っているのである。性の別名としていないのではない。仁義によつて性を飾つて言うというのは、「人の性は善」というのと同様である。だから仁義を性としているのだ。初めのほんのわずかな差がのちのちの大きな違いへとつながる。だからこの二つの違いを弁じないわけにはいかないのである。

【注釈A—稿本】

この部分がほぼ底本の形になるのは「元禄九年校本」の改訂後の段階。各稿本の改訂のあとが甚だしいため、以下、「第二本」「元禄九年校本」「定本」の改訂前の全文を掲げる。なお、「元禄十六年定本」は底本とほぼ同じ。

「第二本」

「仁は人の美德にして、万善の本なり。蓋し慈愛の徳、充実通徹して、至らざる所莫きを、之れ仁と謂ふ。故に、人能く其の忍びざるの心を推して、達せざる所莫きときは、則ち仁為り。蓋し学んで仁に至るを以て言ふ。夫れ孝弟は、性なり。己に有するを以て言ふ。仁義は、徳なり。天下に達するを以て言ふ。何を以て之を言ふか。孟子曰く、人の学ばずして能くする所の者は、其の良能なり。慮らずして知る所は、其の良知なり。孩提の童も、其の親を愛するを知らざること無く、其の長ずるに及んでや、其の兄を敬ふを知らざること無きなり、と。孝弟は人の性為ること明らかなり。中庸に曰く、知仁勇の三者は天下の達徳なり、と。孟子亦曰く、既に飽くるに徳を以てすとは、仁義に飽くるを言ふなり、と。仁義は徳の名為ること明らかなり。而るに孟子曰く、仁義礼智は外より我に鏝かすに非ざるなり。我之を固有すとは、何ぞや。蓋し孔孟の仁義を以て性と為す者は、是れ仁義を以て性に名づくるなり。性の名に非ず。故に曰く、親を親しむは仁なり。長を敬ふは、義なり、と。豈に仁義を以て性に名づくるに非ずや。人の性、善と謂ふが若し。故に仁義を以て性と為すは、則ち可。仁義を以て性中の名と為すは、則ち不可。毫釐の差も千里の謬。其れ弁ぜざる容けんや」。

「元禄九年校本」

「論に曰く、仁は天下の大徳なり。智者は焉を利とし、仁者は焉に安んず。蓋し慈愛の心、内自り外に及び、遷き自り遠きに至り、充実通徹して、達せざる所莫きは、仁なり。故に孟子曰く、人皆な忍びざる所有り。之を其の忍ぶ所に達するは、仁なり。人皆な為さざる所有り。之を其の為す所に達するは、義なり。有子孝弟を以て仁の本と為す。是なり。蓋し孝弟は、性なり。仁義は、徳なり。性は己に有するを以て言ふ。徳は天下に達するを以て言ふ。孟子曰く、孩提の童も、其の親を愛するを知らざること無く、其の長ずるに及んでや、其の兄を敬ふを知らざること無きなり、と。孝弟は人の性為ること明らかなり。中庸に曰く、知仁勇の三者は天下の達徳なり、と。孟子曰く、既に飽くるに徳を以てすとは、仁義に飽くるを言ふなり、と。仁義は徳の名為ること明らかなり。或ひと曰く、孟子の所謂仁義礼智は外より我に鑠かすに非ざるなり、我之を固有すと、此の言と相異なるは、何ぞや、と。曰く、此れ本と四端の心を指して言ふ。仁義礼智は即ち性なりと曰ふに非ず。所謂固有と云ふ者は、即ち性と曰ふものと自ら別なり。蓋し孔孟の仁義を以て性と為す者は、是れ仁義を以て性に名づくるなり。性の名と為すに非ず。孟子曰く、惻隱の心は仁なり。羞惡の心は義なり。恭敬の心は礼なり。是非の心は智なり、と。又曰く、親を親しむは仁なり。長を敬ふは、義なり、と。是なり。其の所謂惻隱の心は仁の端なり。羞惡の心は義の端なり。辞讓の心は礼の端なり。是非の心は智の端なり、此れ正に其の理を言ふ者なり。蓋し端は本なり、始なり。四端の心を拡充して仁義に至るを謂ふなり。学者、其の言の各おの当たたる攸有るを知りて可なり。千里毫釐の謬、正に此に在り。弁ぜざる答からず」。

「定本」

「論に曰く、仁は天下の達道にして、人の焉に由りて行はざる可からざる者なり。而して其の本に循ふと

きは、則ち人性の善、此の四端を具ふ。苟も擧げて之を充つれことを知るときは、則ち以て仁に至る可し。故に孟子曰く、人皆な忍びざる所有り。之を其の忍ぶ所に達するは、仁なり、と。又曰く、惻隱の心は仁の端なり、と。又曰く、親を親しむは仁なり。他なし。之を天下に達するなり、と。有子孝弟を以て仁の本と為す。其の言相符す。蓋し孟子之を祖述するなり。先儒の説に以てらく、仁義は人性具ふる所の理、性中只仁義有るのみ。曷ぞ嘗て孝弟有らん、と。若し其の説の如くんば、則ち仁は体にして本為り。孝弟は用にして末為り。是に於いて有子の言と相鑿するに似たり。故に曰く、仁を為すは孝弟を以て本と為す。性を論ずるは仁を以て孝弟の本と為す、と。然れども既に、其の人と為りや孝弟と曰ひ、又た本立つて道生ずと曰へば、則ち其の孝弟を以て仁の本と為すこと知る可し。然らば則ち孟子□仁義を以て固有と為るは、何ぞや。蓋し謂らく、人の性、善。故に仁義を以て其の性と為すなり。此れ仁義を以て性に名づくるなり。直ちに仁義を以て人の性と為すに非ざるなり。毫釐千里の謬、正に此に在り。弁ぜざるべからず」。

【注釈B—主著】

「慈愛之心、自内及外、自邇至遠、充塞通徹、莫所不達、即是仁也」 同旨の言は、「語孟字義」仁義礼智1、「中庸發揮」18、「論語古義」公冶長4大註、顔淵1大註、「童子問」上四三、中六、「古學先生文集」五「同志會筆記」13、「孟子古義」梁惠王上1。「論語古義」憲問17大註では「仁は大徳なり。慈愛の深きこと、処りては則ち天下を弘済し、後世を匡正するの志、懷を離れず、出でては則ち其の利沢恩恵、遠く天下後世に及ぶに足るに非ざれば、則ち可ならず」。

【孝弟、性也】 【論語古義】為政21大註、「孟子古義」離婁上27、告子下2。

【仁義、徳也】 【語孟字義】徳1、仁義礼智3など。

【性者以有於己而言。徳者以達於天下而言】 同様の「性」と「徳」（「道」）との対比は、「語孟字義」仁

義礼智³、『童子問』上一四。

【注釈C―出典その他】

「人皆有所不忍。達之於其所忍、仁也」 『孟子』 尽心下31。

「孟子以孝弟為其良知良能」 『孟子』 尽心上15に見える。」

「立人之道、曰仁与義」 『易』 説卦。

「知仁勇三者、天下之達徳也」 『中庸』 18。

「孟子又以仁義為人之固有」 『孟子』 告子上6。

「人之性善」 『孟子』 告子上2など。

※『古学先生文集』五「策問」(寛文二年正月十八日)はこの章に関するもの。

※東涯『弁疑録』三1はこの章に関するもの。

〈学而篇第三章〉

【本文】

子曰、巧言令色、鮮矣仁。

【書き下し文】

子の曰く、巧言令色ハ、鮮シ仁。

【小註】

巧、好。令、善也。鮮、少也。言好其言語、善其顔色、致飾於外、則偽耳。何徳之有。

【書き下し文】

巧ハ、好。令ハ、善ナリ。鮮ハ、少ナリ。言ふころハ、其ノ言語ヲ好クシ、其ノ顔色ヲ善クシ、飾リヲ外ニ致ストキハ、則ち偽のみ。何ノ徳カ之れ有ラン。

【現代語訳】

「巧」は「立派」、「令」は「善い」。「鮮」は「少ない」。その意味は、「その言葉つきを立派にし、顔つきを善く見せて、外面を飾ろうとするのは、虚偽以外のなものでもない。どんな徳もそこにはない」。

【注釈 A—稿本】

「則偽耳。何徳之有」 「元禄九年校本」「元禄十六年定本」では「則ち徳を去ること遠し。其の仁少なきこと知る可し」。「第二本」、「定本」は判読難。

【注釈 C—出典その他】

「巧、好。令、善也」 『論語集註』。

「好其言語、善其顔色、致飾於外」 『論語注疏』(注)に「巧言は、其の言語を好くす。令色は、其の顔色を善くす」、「論語集註」に「其の言を好くし、其の色を善くし、飾を外に致す」。

【大註】

此以德為仁。仁即德也。蓋孔門以仁為學問之宗旨、而莫不從事於此。故不曰道、不曰德、皆或以仁命之。蓋德以仁為主、而以誠為本。剛毅朴訥、外非而内実誠。故曰近。巧言令色、外似而内実偽。故曰鮮。其弁誠偽於幾微之間、至嚴矣。

【書き下し文】

此レ徳ヲ以て仁ト為。仁ハ即ち徳ナリ。蓋シ孔門ハ仁を以て學問の宗旨ト為して、事ニ此に従ハザルハ莫シ。故ニ道ト曰はず、徳ト曰はず、皆ナ或ハ仁ヲ以テ之ニ命ス。蓋シ徳ハ仁ヲ以て主ト為て、誠ヲ以て本ト為。剛毅朴訥ハ、外非にして、内実ニ誠。故ニ曰ク近シト。巧言令色ハ、外似て、内実ニ偽。故ニ曰ク鮮シト。其ノ誠偽ヲ幾微の間ニ弁スルコト、至嚴ナリ。

【現代語訳】

ここでは徳のことを仁と言っている。仁は徳そのものである。思うに、孔子学派では仁を學問の中核において、あらゆる場合にそれに従い、実践した。だから、道や徳と言わないで、しばしばそれらを仁と言った。思うに、徳は仁を中心として、誠を基本とする。頑固で無骨な者は外面はよくないが、内面は誠そのものである。だから「(剛毅朴訥は仁に)近い」と言った。言葉づきを立派にし、顔づきを善く見せるのは、外面はよく見えるが、内面は不誠実そのものである。だから「(巧言令色は仁が)少ない」と言った。誠と偽との微妙な差を見分ける態度は、非常に嚴格である。

【注釈A—稿本】

この部分、各稿本の改訂のあとが甚だしいために、各稿本の改訂前の全文を掲げる。なお「元禄十六年定本」には論註があるが、一括してここに掲げる。

【第二本】

「剛毅朴訥は、外非にして、内実に誠。故に曰く近しと。巧言令色は、外似て、内実に偽。故に曰く鮮しと。其の誠偽を幾微の間に弁ずること、至嚴なり。○孔門は仁を以て学の宗旨と為す。門人弟子此に従事せざるは莫し。故に道と曰ひ、徳と曰ふは、皆な仁を以て之に名づく。学者当に之を言表に得べくして、文に従ひて義を生ず可からず」。

【元禄九年校本】

「剛毅朴訥は、外非にして、内実に誠。故に曰く近しと。巧言令色は、外似て、内実に偽。故に曰く鮮しと。其の誠偽を幾微の間に弁ずること、至嚴なり。仁は徳の長なり。故に孔門は仁を以て其の宗旨と為して、門人弟子此に従事せざるは莫し。故に道と曰ひ、徳と曰ふは、皆な仁を以て之に名づく。而して夫子仁を答問するも、亦た或は専ら徳を養ふを以て之を告ぐ。蓋し仁に非ざるときは、則ち道徳為るを得ず、亦た道徳に非ざるときは、則ち仁為るを得ざるを以てなり。学者当に之を言意の表に得べくして、文に従ひて義を生ず可からず」。

【元禄十六年定本】

「此れ仁を為す者は誠を以て主と為さざる可からざることを明らかにす。蓋し仁は実徳なり。誠に非ざれ

ば、則ち其の徳を成すこと能はず。剛毅朴訥は、外非にして、内実に誠。故に曰く近しと。巧言令色は、外似て、内実に偽。故に曰く鮮しと。其の誠偽を幾微の間に弁ずること、至嚴なり」。

「論に曰く、或ひと問ふ、仁者は愛せざる所靡し。而るに論語の言ふ所、或は愛の字と相渉らざる者有るに似たるは、何ぞや、と。曰く、仁者は其の心愛を以て体と為す。故に寛平慈祥にして、専ら己に反求するを知りて、人を責むるや甚だ薄し。常に戚々の憂無く、亦た汲々の需無し。皆な一の愛自り流出す。蓋し衆徳の長なり。故に夫子仁を問ふに及ぶ毎に、則ち仁の理を以てせずして、必ず仁者の心を挙げて之に答ふ。一言の能く尽くす所に非ざるを以てなり。凡そ道と曰ひ、徳と曰ふは、皆な仁を以て之に名づく。蓋し道徳を為すには皆な仁を以て本と為して、仁に非ざれば則ち又た以て道徳を見ること無ければなり」。

「定本」

「孔門の教は仁を以て学問の宗旨と為して、平生の受用、此に従事せざるは莫し。故に道と曰はず、徳と曰はず、或は仁を以て之に命ず。此の章の如き是なり。蓋し徳は仁を以て主と為して、□仁は誠を以て本と為す。剛毅朴訥は、外に質にして、内に実なり。故に曰く近しと。巧言令色は、外に似て、内に偽る。故に曰く鮮しと。其の誠偽を幾微の間に弁ずること、至嚴なり」。

【注釈B—主著】

「仁即徳」

『語孟字義』徳1、仁義礼智3など。

「孔門以仁為学問之宗旨」 同旨の言は、『語孟字義』仁義礼智7、『語孟字義』附「大学非孔氏遺書弁」、「童子問」上四三、五六、『孟子古義』公孫丑上6、『古学先生文集』四「諸友為余賀七袞宴集講義」、五「策問」(寛文二年二月十八日)。「童子問」上三四では「聖門学問の第一字は是れ仁」。また「童子問」上四二で

は「孔門の諸子、仁を以て家常茶飯と為す」。『語孟字義』仁義礼智2では「孔門の学者、仁義礼智を以て家常茶飯と為す」。

「不曰道、不曰德、皆或以仁命之」 同旨の考えは、『語孟字義』仁義礼智7

「德以仁為主、而以誠為本」 同旨の言は、『語孟字義』仁義礼智6。『孟子古義』尽心下10では「德は仁を以て成り、仁は誠を以て至る」。『語孟字義』誠3では「所謂仁義礼智、所謂孝弟忠信は、皆な誠を以て本と為す」。

なお、仁斎は学問には「本体(道德)」と「修為」の二種類があり、「仁義礼智」は前者、「忠信敬恕の類」は後者に属すとする(『語孟字義』忠信5、『論語古義』為政2大註)。『語孟字義』敬2では「聖門の学は仁義を以て宗と為して、忠信を主と為す」。『大学定本』1では「論孟」では「仁義礼智」を「教」とし、「孝弟忠信」を「要」とすると言う。『童子問』上三四では「聖門学問の第一字は是れ仁、義以て配と為し、礼以て輔と為し、忠信以て之が地と為す」。『童子問』下二二では「仁義礼智」を立てて人に由らせ、「忠信以て地と為し、篤敬以て之を守り、恕以て之を行ふ」。『童子問』下二三では「仁に居り義に由り、忠信以て之を守り、敬恕以て之を行ふ」。『仁斎日札』5では「聖門学問の第一字は是れ仁、義を以て配と為し、知を以て輔と為し、礼を以て地と為して、進修の方は専ら忠信に在り」。『仁斎日札』53では「道の至極は…君臣父子夫婦昆弟朋友の交りにして、孝悌忠信を以て本と為す」。『古学先生文集』二「論春秋鄭伯克段」では『春秋』は「仁義を以て本と為し、忠厚以て之を出だし、礼儀以て之を行ひ、謹嚴以て之を成す」。

「誠偽」 「誠」が「偽」と対することについては、『語孟字義』誠1。

【注釈C—出典その他】

【剛毅朴訥】 『論語』子路27。

〔近〕『論語』子路27。

〈学而篇第四章〉

【本文】

曾子曰、吾日三省吾身。

【書き下し文】

曾子ノ曰く、吾れ日ニ三タヒ吾が身ヲ省みル。

【小註】

曾子、孔子弟子。名參、字子輿。三省、猶言三復。丁寧反復之意。凡三字、在句首者、為三次之義。在句尾者、為數目之字。如君子之道四、易有聖人之道四之類、是也。

【書き下し文】

曾子ハ、孔子ノ弟子。名ハ參、字ハ子輿。三省ハ、猶を三復と言ふがごとし。丁寧反復の意。凡そ三ノ字、句首に在ル者ハ、三次の義為リ。句尾に在る者ハ、數目の字為リ。君子の道は四、易に聖人の道有四の類の如き、是なり。

【現代語訳】

「曾子」は、孔子の弟子で、名は参、字は子輿。「三省」は、「三復」と言うのと同様である。つまり念入りに繰り返すという意味である。一般に「三」という字は、句の初めにあるときは、三度の意である。句末にあるときは、簡数を表す字である。「君子の道は四つ」、「易に聖人の道が四つある」などが、それである。

【注釈A—稿本】

「三省、猶言三復。丁寧反復之意」 「定本」は「三省は、三復、三令の類の如し。丁寧反復して其の身を省みるなり」。

「凡三三……」 以下の議論は「第二本」書き入れ段階で現われる。「定本」では句首にある例として「三たび白圭を復す」(『論語』先進5)、「三たび天下を以て讓る」(『論語』泰伯1)が、句尾にある例として「君子の道に貴ぶ所の者は三」(『論語』泰伯5)、「君子の道なる者は三」(『論語』憲問30)が挙げられている。

【注釈C—出典その他】

「曾子、孔子弟子。名参、字子輿」 『論語集註』。

「三復」 『論語』先進5。

「三字、在句首者、為三次之義、在句尾者、為數目之字」 東涯『論語古義標註』に、「凡そ数目の字、三の如き五の如き、句首に在る者は三次五次の義と為す。泰伯三たび天下を以て讓る(『論語』泰伯1)、南容三たび白圭を復す(『論語』先進5)、伊尹五たび湯に就き五たび桀に就く(『孟子』告子下6)、禹稷三た

び其の門を過ぎて入らず（『孟子』離婁下29）の如き、是なり。句尾に在る者は三箇五箇の義と為す。子産、君子の道有り四（『論語』公治長15）、君子の道なる者は三（『論語』憲問30）、君子の道に貴ぶ所の者は三（『論語』泰伯5）、就く所三、去る所五（『論語』告子下14）、及び天下の達道五、天下の達徳三（『中庸』18）、易に聖人の道有り四（『易』繫辞上）の如き、是なり」とこれらの具体例を挙げ、かつ「三次」は「三回」に限らず「繰り返し」の意とする。『乗燭譚』二・23にも詳論がある。

『君子之道四』 『中庸』13、『論語』公治長15。

『易有聖人之道四』 『易』繫辞上。

【本文】

為人謀而不忠乎。与朋友交而不信乎。伝不習乎。

【書き下し文】

人の為に謀りて忠ナラざるか。朋友と交りテ信ナラざるか。習はざるを伝ふるか。

【小註】

孔氏曰、忠、謂尽中心。信、実也。何氏曰、伝不習乎、言凡所伝授之事、得無素不講習而妄伝乎。一説、伝、謂受之於師。習、謂熟之於己。然前説為長。

【書き下し文】

孔氏ノ曰く、忠は、中心ヲ尽くすヲ謂ふ、と。信は、実なり。何氏ノ曰く、習はざるヲ伝ふるかトハ、

凡ソ伝授スル所の事、素ヨリ講習せずして妄リニ伝フルコト無きを得ルヲ言ふ、と。一説に、伝は、之を師に受くるを謂ふ。習は、之を己に熟するを謂ふ、と。然れども前説を長ぜりと為。

【現代語訳】

孔安国は「忠は、真心を尽くすことを言う」とする。「信」は「誠実」。何晏は「伝不習乎」は、「すべて教えられたことを、平素講習しないで、いいかげんに人に伝えなかつたか」の意とする。一説に、「伝は、師から教えを受けること。習は、それを自身に習熟すること」とする。しかし前説の方が勝っている。

【注釈A—稿本】

「孔氏曰、忠、謂尽中心。信、実也」 「元禄十六年定本」までは「己を尽くすを之れ忠と謂ひ、実を以てするを之れ信と謂ふ」。

「一説……」 以下の議論は「元禄九年校本」で初めて現われる。「定本」では削除の指示あり。これは底本の「此一説削りたきもの。かやうのこといはば、かたはし云べし。皆な人の能く知ること」という付箋を承けたものと思われる。

【注釈B—主著】

「孔氏曰、忠、謂尽中心。信、実也」 「語孟字義」忠信一等では、程頤の「己を尽くすを之れ忠と謂ひ、実を以てするを之れ信と謂ふ」(程氏遺書一一、179)を引く。

【注釈C—出典その他】

「孔氏曰、忠、謂尽中心。信、実也」 「孔氏」は孔安國を指すと思われるが、実は「忠、謂尽中心」は『論語注疏』里仁15の邢疏の文（同箇所『論語古義』では、やはり初めこれを「孔氏」の語として引用しているが、のち訂正されている）。

「何氏曰……」 「何氏」は何晏。「凡所伝授之事、得無素不講習而妄伝乎」は『論語注疏』の邢疏の文（何晏自身の語はやや異なる）。なお、東涯『弁疑録』三3で何晏等の説が正しいことが詳述されている。

「伝、謂受之於師、習、謂熟之於己」 『論語集註』。

【大註】

此曾子於此三者、常々無忘於心、又毎日三次、竦動興起、自省其身、若此。可謂於爲学之道、無余蘊矣。

【書き下し文】

此レ曾子此ノ三者ニ於いて、常々心ニ忘るルコト無ク、又た毎日三次、竦動興起、自ラ其身ヲ省みルコト、此くの若シ。学を爲すの道に於いて、余蘊無しと謂ふ可し。

【現代語訳】

これは曾子がこの三つのことを、いつも心に銘記し、また毎日何度も、これらのことが実践できていないかを畏れ、またそれを誠実に実践しようと奮起し、それが実践できたかどうか反省する。このように曾子はいつもこの三つの事柄の実践に力を尽くしていた。学問の仕方を余すことなく示している。

【注釈A—稿本】

「可謂於為學之道、無余蘊矣」 「第二本」では「切なりと謂ふ可し」とし、その後「論語集註」の「曾子此の三者を以て日に其の身を省み、有れば則ち之を改め、無ければ則ち勉めを加ふ。其の自ら治むるの誠切此くの如し。學を為すの本を得たりと謂ふ可し。而して三者の序は、則ち又た忠信を以て伝習の本と為す」を引く。

「定本」では、この部分は「蓋し此の三者は、皆人の為に苟もせざるの事。曾子此を以て自ら省みるときは、則ち古人の身を修むる所以の者は、専ら人を愛するを以て本と為す。故に其の自ら省みる所の者も、亦た人の為にするに在りて、後世の學の外誘を絶ち思慮を屏くるを以て省身の要と為すが如きに非ざる」と、従ひて知る可し。なお、同様の議論が東涯『弁疑録』三二にある。

【論註】

論曰、古者道德盛、而議論平。故惟言孝弟忠信足矣。聖人既没、道德初衰、道德初衰、而議論初高、及其愈衰也、則議論愈高、去道德愈益甚。人皆知悅議論之高、而不知其去道德益遠矣。伯老之説、後儒之學、是已。蓋天地之道、存于人。人之道、莫切於孝弟忠信。故曰、惟言孝弟忠信足矣。若曾子之言、後世學者、孰能識其造於至極、而無復可加者乎哉。觀後篇答孟敬子將死之語、与此章意、若出一轍、則知此章蓋出於其晚年、而非初年之言也。然則曾子一生之學、謂此章尽之、可矣。先儒惜其嘉言善行、不尽伝於世者、亦不足為深知論語也。

【書き下し文】

論二曰ク、古ハ道德盛ニシテ、議論平ラカナリ。故ニ惟ダ孝弟忠信を言ヒテ足レリ。聖人既ニ没シ、道

徳初めテ衰へ、道徳初めテ衰ヘテ、議論初めテ高く、其ノ愈々衰フルニ及ンテハ、則ち議論愈々高ウシテ、道徳ヲ去ルコト愈々益スこと甚ダシ。人皆な議論の高キヲ悦ブコトヲ知ツテ、其ノ実道徳ヲ去ルコト益々遠キヲ知らズ。仏老の説、後儒の学、是ノミ。蓋シ天地の道ハ、人ニ存ス。人の道ハ、孝弟忠信ヨリ切ナルハ莫シ。故ニ曰く、惟だ孝悌忠信を言ひて足れり、と。曾子の言ノ若キ、後世ノ学者、孰カ能ク其ノ至極ニ造リテ、復タ加ふ可キ無キ者ナルコトヲ識ランヤ。後篇孟敬子ニ答フル将ニ死セントスルの語ヲ觀ルニ、此ノ章ノ意と、一轍に出づるが若キトキハ、則ち知ル此ノ章蓋シ其ノ晩年ニ出デテ、初年の言ニ非ス。然ラバ則ち曾子一生の学、此ノ章之を尽クセリト謂ヒテ、可ナリ。先儒其ノ嘉言善行、尽ク世に伝ラザルコトヲ惜シム者ハ、亦た深ク論語ヲ知ると爲るに足らざるなり。

【現代語訳】

「孝弟忠信」を説くこの曾子の語こそが最上のものであることを論じる。

古は道徳が盛んであり、議論は穏やかであつた。だから「孝弟忠信」を言うだけで十分であつた。聖人がいなくなつてから、道徳は衰へはじめた。道徳が衰へはじめると、議論がしだいに抽象的になつていった。道徳がますますおとろえるにつれ、議論はいよいよ抽象性を増し、どんどんと道徳から遠ざかつていった。人々は抽象的な議論を喜んで、実際には道徳からますます遠ざかつていることに気付かなかつた。仏教や老莊の説、後世の儒学が、そのよい例である。思うに、天地の道は人にかかつてゐる。人の道は「孝弟忠信」が最も大切である。だから、「孝弟忠信」を言うだけで十分だった、と私は言つたのである。後世の学者は、曾子の語が最上のもので、これ以上付け加えるものがないことを分かつてゐない。後篇の臨終の際、孟敬子に答えた言葉を見ると、この章の考えと同じ意味である。このことから、この章がおそらく晩年のものであり、初年の言葉でないことが分かる。つまり、曾子の一生涯の学問は、この章がそれを

尽くしていると言つてよいので、先儒は、曾子の立派な言動がすべては世に伝わっていないことを惜しんでいるが、深く『論語』を知るものとは言えないのである。

【注釈A—稿本】

この部分がほぼ底本の形になるのは「元禄九年校本」の書き入れの段階。各稿本の改訂のあとが甚だしいため、以下、「第二本」「元禄九年校本」の改訂前の全文を掲げる。なお、「元禄十六年定本」「定本」は底本とほぼ同じ。

「第二本」

「學術の世道を離るること久し。何となれば、古人の学は実なり。今人の学は虚なり。蓋し古人の学は虚無の相淆すること無し。故に近くして用有り。今人の学は雜ふるに異端□□説を以てす。故に功無し。曾子の此の言を觀て、以て今人の古人と異なるを見る可し」。

「元禄九年校本」

「論に曰く、嗚呼、古は道德盛にして、議論平らかなり。故に只だ孝弟忠信を言ひて足れり。聖人既に没して、道德初めて衰ふ。道德初めて衰へて、議論初めて高し。其の愈いよ衰ふるに及んでや、則ち議論愈いよ高くして、道德を去ること愈いよ益ます高し。人皆な議論の高きを悦ぶことを知りて、其の実道德を去ること甚だ遠きを知らず。是に於いて理を説き、心を説き、虚を説き、無を説き、種種の虚靈不昧、冲漠無朕等の説起くる。此れ皆な老仏の緒余にして道德の本然に非ず。蓋し天地の道は、全く人に存す。人の道は、孝弟忠信より切なるは莫し。故に曰く、只だ孝弟忠信を言ひて足れり、と。曾子の言の若き、後

世の学者、孰か能く其の至極に造りて、以て復た加ふ可き者無きを識らんや」。

【注釈B——主著】

「道德初衰、而議論初高……」 同旨の言は「論堯舜既没邪說暴行又作」、「童子問」上二〇。「議論」と「德行」を対比的に述べる例は、「語孟字義」理2。

「天地之道、存于人」 「童子問」下五〇では「人倫有るときは、則ち天地立つ。人倫無きときは、則ち天地立たず」。また、「童子問」上八、「論語古義」子罕30では「人の外に道無く、道の外に人無し」（この語はもと『論語集註』衛靈公28の語）。

「人之道、莫切於孝弟忠信」 同様の考えは「童子問」上八、一九。また「童子問」下二五では程頤の「人道は唯だ忠信に在り」という語を確言として引く。

【注釈C——出典その他】

「答孟敬子將死之語」

「論語」泰伯5。

「此章蓋出於其晚年」

「論語大全」引く朱子語に「（三省は）是れ曾子晚年進徳の工夫」。

「先儒惜其嘉言善行、不尽伝於世」

「論語集註」（謝良佐の語）に「惜しいかな、其の嘉言善行、尽くは世に伝はらず」。

※「古学先生文集」五「策問」（寛文二年二月十八日）はこの章に関するもの。

※東涯「弁疑録」三二、3はこの章に関するもの。

（二〇〇〇年四月十五日 受理）